



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語古文献における言語学的諸問題
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 124, 153(左)-180(左)
Issue Date	2008-02-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32431
Type	departmental bulletin paper
File Information	SAT0.pdf



アイヌ語古文献における言語学的諸問題

佐 藤 知 己

アイヌ語古文献における言語学的諸問題¹

佐 藤 知 己

1. はじめに

筆者はこれまで佐藤(1995, 1998 a, 1998 b, 2003 a, 2003 b, 2005 など)によって古文献によるアイヌ語研究をすすめてきた²。しかしながら、古文献を用いたアイヌ語研究は、アイヌ語研究において重要な研究分野の一つでありながら理論的、方法論的な基盤がまだ確立されているとは言えない分野である。本稿では理論的な側面も含めて、これまでの論考では十分論じることができなかったいくつかの理論的、実際的問題点について述べることにする。

2. 古文献を用いたアイヌ語研究の意義と目的

言語学的な問題点に触れる前に、古文献を用いたアイヌ語研究に関する一般的な問題点について述べておく。

古文献を用いたアイヌ語研究は、アイヌ語の歴史的な変遷の研究を主たる目的とするものである。アイヌ語は無文字言語であり、古い記録に乏しい言語であることを考慮すれば、不十分な資料と言えども貴重であり、この点からだけでも研究する意義があると考えられる。また、言語は時間と共に変化

¹ 本稿は科学研究費(基盤研究(C))、「古文献によるアイヌ語史の構築」、研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己、課題番号 17520245)による研究成果の一部である。

² これらは佐藤(2005)を除き、佐藤(2004)に収められている。

するものであり、アイヌ語もこの点において例外ではあり得ない。現在知られているアイヌ語がどのようなプロセスを経て形成されたものであるのかは大きな問題であり、アイヌ語研究の重要な課題の一つである。すなわち、アイヌ語を記した古い文献の価値はなによりもまずアイヌ語の歴史を解明する上で役に立つ、という点にある。この点を常に意識しながら研究を進めることが重要である。しかしながら、これまでの古文文献を用いたアイヌ語の研究は、古文文献に現れる形式に当たるものを現代のアイヌ語辞書類から探して引き当てるといったものがほとんどであったと言える。これは基礎的な作業としては必ずしも無意味とまでは言えないけれども、アイヌ語の言語学研究としては価値が低いものと言わざるを得ない。言語学的な研究の基礎となる作業の段階に留まっていて、本来の目標であるべき言語学的な研究の段階にまで十分達していない点がある、ということは別として、この点についてはもっと本質的な問題もある。つまり、種々の辞典から単語をいくら広く収集しても、結局のところ既存の研究を無批判に寄せ集めているにすぎないのであって、このようなやり方では既存の研究を発展させることも、当該の文献について新たな知見を得ることも困難なのであり、結局何のために古文文献を研究しているのかわからないことになる可能性が大きいであろう。さらに言えば、古文文献の中に現代と同じものを確認するだけならば、なにもわざわざ苦勞して資料的信頼性の低い古文文献を調べる必要はないと言える。はじめから現代の資料だけを見ればよい。しかも、既に述べたように、辞典の中から似た単語を探す作業は、厳しい言い方をすれば素人でもできるのであって、言語学的な研究としては不十分であろう。現代のアイヌ語形の引き当てはあくまでも基礎的な作業の一環に過ぎない、ということが正しく理解されなければならない。音や意味が現代の形式と類似している形式が古い文献に記されているからと言って、歴史的に違う時代のものを言語学的に同一視してはならない、という重要な点が見逃されてしまう恐れがある。また、語彙の引き当てに熟中する弊害は他にもある。言語学的な研究としては、当然、文法についても考慮する必要があることは明かである。いくら英語の単語を知っていても、それだけでは英語について専門的な知識があるとは言えないことは、考えれ

ばすぐにわかることである。百歩譲って、辞書や文法書が完備している言語の場合ならば文献だけに基づいてその言語を「研究」することも全く不可能ではないかもしれないが、アイヌ語のように資料がととのっていない言語の研究において、既存の辞書や文法書だけを頼りにしたのでは、いかなる問題についてであれ断定を下すことは無謀と言わざるを得ない。アイヌ語の場合にはどのような研究を行うにせよ、既存の辞書や文法書の不備を補うために、まず研究者自身が現代のアイヌ語資料について専門的な研究を行う必要があるのである。さらに、その場合、研究の基礎となるのは研究者自身が話者から直接調査したフィールド調査の資料であることが望ましいことは言うまでもない。自分自身がかつて一度も調査したことのない、細かな点に通じていないアイヌ語方言の資料（しかも多くの場合、単なる語彙の資料）を他の研究者の資料から引用して「研究」するのは、やむを得ない場合を除いてはあまり好ましいことではないと言える。しかし、そうなると、自分がフィールド調査していない方言に近い文献資料は研究できないということになりはしないか、という懸念も生まれるかもしれない。これについては基本的には「その通りである」と言うしかない。このような場合、他の研究者の資料に基づいて研究するのはあくまでも緊急避難的なものであって、できればその方言を専門的に研究している研究者に任せるのが望ましく、やむを得ない場合でも不備を自覚して慎重に行うべきものであろう。他方言についても知見を広める努力をすることは勿論重要ではあるけれども、その方言を専門的に研究している研究者には所詮は及ばないものである。さらに言えば、自分が直接調査したことがある方言と特徴が大きく違っている資料を扱う場合でも、自分で調査した方言の資料がある場合には基本的にはそれを用いてまず研究する必要があると筆者は考える。これは一見不合理に思えるかもしれない。しかし、この方法によって明かにできる範囲には確かに限界があるけれども、細部について責任が持てない他の研究者の資料や解釈を無批判に用いるよりも、たとえ方言が異なる可能性があるにしても、自分自身が組織的な知識を有する方言の資料と比較して体系的に研究した方が有意義な結果が得られやすいと思う。それで解決できない問題については、残念ではあるけれども他

方言の専門家に委ねるのがよりよい解決策であろう。自分が直接調査したこともない方言の資料を安易に机上で扱うよりは、はるかに健全であると思う。

アイヌ語の古文獻について、もう一つ考えておかなければならないのは、資料としての位置付けの問題がある。学問分野が違えば基本的な思考方法が異なるために、なかなか理解しあえない点があるのはある程度やむを得ないが、言語資料としてのアイヌ語古文獻の位置付けは、歴史資料としての位置付けとは異なるものだ、という点にも注意が必要である。「どこの誰から聞いたとも知れない文献を証拠に言語学者がもっともらしい論を展開するのは無意味である」という趣旨の意見を（特に歴史畑の研究者から）聞くことがある。歴史研究者にとって、ある文献がいつごろ誰によって書かれたか、また、そこに記録されている内容が誰から聞いたものであるのか、その人物の出自、事跡等に事細かな興味が向けられるのは当然であろう。これらの事実が言語研究者にとっても重要なものでないとはまでは言わない。詳しい事情が明かであるにこしたことはない。しかし、これらの事実が一般の人々にとっていくら興味深いものであったとしても、これらは言語学者の第一の関心事ではないのである。言語学者にとって重要なのは、ある特定の個人に関する情報ではない。そのようなものをいくら詳しく調べたからと言って、言語的な問題が説明できるわけではない。言語学者にとって重要なのは、記録されている言語形式が示している体系的、社会習慣的特徴と思われる部分なのである。言語は話者とは独立に存在する社会習慣的な記号の体系であるから、現代の資料を含めた様々な資料を勘案し、体系的に考察することによって言語事実を追求することは、たとえ個別的な事情が不明な、精度の不十分な資料であってもかなりの程度可能なのである。もちろん、だからと言って、たった一つの資料によって断定的なことを述べることができると言っているわけではない。少しずつ資料を積み重ねていくことによって、より確実な成果を得て行く必要がある、と考えているのである。他分野の研究者の方々も、言語学者の悪戦苦闘を外から論評しているゆとりがあるのならば、ご専門の蘊蓄を生かして、より確実な言語資料を歴史資料の中からぜひ提供していただきたいものである。

3. 「松前ノ言」をめぐって

「松前ノ言」は正確な成立年代は不明であるが、最古のアイヌ語彙集(17世紀前半の成立か)と言われており(詳しくは金田一 1924, 佐藤 1998b を参照), アイヌ語研究においては重要な文献である。「松前ノ言」において比較的確実に現代諸方言の形式を「引き当てる」(該当すると思われる形式を現代の資料から引証する)ことができる例は以下のようなものである(以下の例に付けられた番号は佐藤(1998b)で用いた通し番号である)³。

- てい多 (2), (3) tēta 「ここに」(千歳方言)⁴
- ゑ川く (2) ek 「来る」(千歳方言)
- あ本ん (3) ahun 「入る」(千歳方言)
- にしやた (4) nisatta 「明日」(千歳方言)
- やいらい介れ (5) iyayraykere 「ありがとう」(千歳方言)
- な可れてい (6) inankarapte 「こんにちは」(帯広方言, 服部 1964 : 335)
- いらむし可れ (7) eramuskari 「知らない」(千歳方言)
- びる可 (8) pirka 「良い」(千歳方言)
- うゑん (9) wen 「悪い」(千歳方言)
- いしやま (10) isam wa 「ないよ」(千歳方言)
- あ多い里い (12) ataye 「～の値段」, ri 「高い」(千歳方言)
- あ多ひ者ぬ (13) ataye 「～の値段」, pan 「(位が) 低い」(千歳方言)
- ゑ川ね (14) etunne 「嫌う」(久保寺 1992 : 71)
- 本しけ (15) hoski 「待て」(服部 1964 : 70)

³ 他方言の資料によって精査すれば他にも引き当てることのできる形式があると思われるが、比較的確実性の高いものに基づいて他の不明形式を推定するという考え方を優先させてあえて無理をしなかった。不明形式についてはなお今後の課題としたい。

⁴ 以下、千歳方言の資料は白沢ナベ氏、静内方言の資料は織田ステノ氏のご教示による。記して感謝申し上げます。

- 志りく川ね (19) sirkunne 「暗い」(千歳方言)
うくらむくら (27) ukoramkor 「相談する」(千歳方言)
や尔 (28) eani 「お前」(千歳方言)
く者ん尔 (29), (37) kuani 「私」(静内方言)
こ川ろし (32) konrusuy 「ほしい」(千歳方言)
毛川らいけ (34) monrayke 「働く」(千歳方言)
本^ゝろの (35) poronno 「たくさん」(千歳方言)
おん可い (35) okay 「ある」(千歳方言)
本ん (36) pon 「小さい」(千歳方言)
つら (37) tura 「～と共に」(千歳方言)
おまん (37), (46) oman 「行く」(静内方言)
志ゆ川なう (41) sonno 「本当に」(千歳方言)
志ゆ川遣い (42) sunke 「嘘をつく」(千歳方言)
者てき (43) patek 「だけ」(千歳方言)
おひ多 (44) opitta 「皆」(千歳方言)
かもい (48) kamuy 「神」(千歳方言)
ゆるしか (48) iruska 「怒る」(千歳方言)
ちい (52) ci 「煮える, 焼ける」(千歳方言)
あまも (52), (54) amam 「米」(千歳方言)
可んたち (53) kamtaci 「糶」(千歳方言)
毛川可り (55) mukar 「斧」(千歳方言)
志やら遍^ゝ (58) saranpe 「絹」(千歳方言)
ちめんふ (58), (59) cimip 「着物」(千歳方言)
く川 (60) kut 「帯」(千歳方言)
遍可ち (61) hekaci 「少年」(千歳方言)
おん可い (62) okkay 「男」(静内方言)
とくい (65) kotokuyne 「～と友人である」(静内方言)
あ川遍い (66) ape 「火」(千歳方言)
王川可 (67) wakka 「水」(千歳方言)

- せ、川可い (68) sesekka 「湯」(美幌方言, 服部 1964: 95)
- せう (69) su 「鍋」(千歳方言)
- 可せう (70) kasup 「しゃもじ」(千歳方言)
- ゑ遍連け (71) epirkep 「小刀」(旭川方言, 服部 1964: 121)
- 遣ん本 (72) kempo 「小さい針(?)」, kem 「針」(千歳方言), -po 指小接尾辞(千歳方言)
- きらい (73) kiray 「櫛」(千歳方言)
- ゑむし (74) emus 「刀」(千歳方言)
- ちゑ川者 (75) seppa 「鐔」(千歳方言)
- 志や類、 (79) sarorun 「鶴」(千歳方言, ただし話者は鳥名については不確かでヒバリかもしれない, と説明している。)
- ち可川ふ (80) cikap 「鳥」(千歳方言)
- 里可 (81) rika 「クジラの脂身」(八雲方言, 服部 1964: 93)
- 遍ろ川け (82) heroki 「ニシン」(幌別方言, 服部 1964: 190)
- ちゑ川ふ (83) cep 「魚」(千歳方言)
- ち川ふ (84) cip 「舟」(千歳方言)
- 連いら (85) réra 「風」(千歳方言)
- あふと (86) apto 「雨」(千歳方言)
- 可もい (88) kamuy 「神」(千歳方言)
- 里いこ (89) rikop 「星」(美幌方言, 服部 1964: 89)
- 志や者 (90) sapa 「頭」(千歳方言)
- ぬんま (91) numa 「毛」(千歳方言)
- き志やら (92) kisara 「耳」(所属形, 千歳方言)
- 志き (93) siki 「目」(所属形, 千歳方言)
- ゑつう (94) etu 「鼻」(千歳方言)
- 遣んま (95) kema 「足」(千歳方言)
- つうきう (97) túki 「杯」(千歳方言)
- い多き (98) itanki 「椀」(千歳方言)
- 志ね川ふ (99), (100) sinep 「一」(千歳方言)

- 徒川ふ (100), (110) tup 「二」(千歳方言)
連川ふ (101) rep 「三」(千歳方言)
いね川ふ (102) ínep 「四」(千歳方言)
あしきね川ふ (103) asiknep 「五」(千歳方言)
ゆ王んふ (104) iwanpe 「六」(千歳方言)
ある王んふ (105) arwanpe 「七」(千歳方言)
つ遍王んふ (106) tupesanpe 「八」(千歳方言)
志ね遍さんふ (107) sinepesanpe 「九」(千歳方言)
王んふ (108), (109), (110) wanpe 「十」(千歳方言)
い可し満 (109) ikasma 「余る」(千歳方言)
い可しま (110) ikasma 「余る」(千歳方言)
志ね (111), (114) sine 「一つの」(千歳方言)
たら (111), (112) tara 「俵」(千歳方言)
徒 (112) tu 「二つの」(千歳方言)
志け (114) sike 「束」(千歳方言, ただし物を数える時の単位で, sine sike で二十のことだと言う。)

以上の例について仮名と引証形式との対応関係をまとめると以下のようになる。

「あ」を含む場合：

a に対応する例：あ多い (12) ataye 「代価」, あ多ひ ataye (13) 「代価」, ある王んふ (105) arwanpe 「七」, あ本ん (3) ahun 「入る」

「い」を含む場合：

1) i に対応する例：いしやま (10) isam wa 「ないよ」, い多き (98) itanki 「椀」, いね川ふ (102) ínep 「四」, い可し満 (109) ikasma 「余る」, い可しま (110) ikasma 「余る」

2) ye に対応する例：あ多い里い (12) ataye ri 「値段が高い」

3) y に対応する例：やいらい介れ (5) iyayraykere 「ありがとう」, 毛川らいけ (34) monrayke 「働く」, きらい (73) kiray 「櫛」, おん可い (35) okay 「ある」, かもい (48) kamuy 「神」, 可もい (88) kamuy 「神」, おん可い (62) okay 「男」, とくい (65) tokuy 「友人 (?)」

4) e に対応する例：いらむし可れ (7) eramuskare, eramuskari 「知らない」

5) 長母音 (?) を表したとみられるもの：

連いら (85) réra 「風」, 里いこ (89) rikop 「星」, てい多 (2), (3) téta 「ここに」, あ多い里い (12) ataye ri 「値段が高い」, ちい (52) ci 「煮える」

6) 出現理由の不明なもの：

志ゆ川遣い (42) sunke 「嘘をつく」, あ川遍い (66) ape 「火」, せ、川可い (68) sesekka 「湯」

「う」を含む場合：

1) u に対応する例：うくらむくら (27) ukoramkor 「相談する」

2) 「うゑ」で we に対応する例：うゑん (9) wen 「悪い」

3) 「せう」が su に対応する例：可せう (70) kasup 「ひしゃく」

4) 長母音 (?) に対応する例：つうきう (97) túki 「盃」, せう (69) su 「鍋」

5) 所属形に相当すると思われるもの：ゑつう (94) etuhu (?) 「～の鼻」

6) 出現理由の不明なもの：つうきう (97) túki 「盃」, 志ゆ川なう (41) sonno 「本当に」

「お」を含む場合

o に対応する例：おん可い (35) okay 「ある」, おまん (37), (46) oman 「行く」, おひ多 (44) opitta 「皆」, おん可い (62) okay 「男」

「か」を含む場合

ka に対応する例：かもい (48) kamuy 「神」, ゆるしか (48) iruska 「怒る」

「可」を含む場合：

ka に対応する例：な可れてい (6) inankarapte 「こんにちは」, いらむし可れ (7) eramuskari 「知らない」, おん可い (35) okay 「ある」, 可んたち (53) kamtaci 「糍」, 毛川可り (55) mukar 「斧」, 遍可ち (61) hekaci 「少年」, おん可い (62) okay 「男」, せゝ川可い (68) sesekka 「湯」, 可せう (70) kasup 「ひしゃく」, ち可川ふ (80) cikap 「鳥」, 可もい (88) kamuy 「神」, い可し満 (100) ikasma 「余る」, い可しま (110) ikasma 「余る」, びる可 (8) pirka 「良い」, 王川可 (67) wakka 「水」, 里可 (81) rika 「クジラの脂身」

「き」を含む場合

1) ki に対応する例：きらい (73) kiray 「櫛」, き志やら (92) kisara 「耳」, 志き (93) siki 「目」, つうきう (97) túki 「杯」, い多き (98) itanki 「椀」

2) k に対応する例：あしきね川ふ (100) asiknep 「五」, 者てき (43) patek 「だけ」

「く」を含む場合

1) ku に対応する例：志りく川ね (19) sirkunne 「暗い」, く者ん尔 (29), (37) kuani 「私」, く川 (60) kut 「帯」, とくい (65) tokuy 「友人 (?)」

2) ko に対応する例：うくらむくら (27) ukoramkor

3) 「川く」でkに対応する例：ゑ川く (2) ek 「来る」

「け」を含む場合

1) ki に対応する例：本しけ (15) hoski 「待て」

2) ke に対応する例：毛川らいけ (34) monrayke 「働く」, ゑ遍連け (71)

epirkep「小刀」, 遍ろ川け (82) heroki「ニンシ」, 志け (114) sike「一束(二十個)」

「介」を含む場合：

やいらい介れ (5) iyayraykere「こんにちは」

「遣」を含む場合：

ke に対応する例：志ゆ川遣い (42) sunke, 遣ん本 (72) kempo「針」, 遣んま (95) kema「足」

「こ」を含む場合

ko に対応する例：こ川ろし (32) konrusuy「ほしい」, 里いこ (89) rikop「星」

「さ」を含む場合

sa に対応する例：志ね遍さんふ (107) sinepesanpe「九」

「し」を含む場合：

1) si に対応する例：あしきね川ふ (105) asiknep「五」

2) s に対応する例：いらむし可れ (7) eramuskare, eramuskari「知らない」, 本しけ (15) hoski「待つ」, ゆるしか (48) iruska「怒る」, い可しま (100) ikasma「余る」, い可しま (110) ikasma「余る」, ゑむし (74) emus「刀」

3) 「しや」で sa に対応する例：いしやま (10) isam wa「ないよ」
にしやた (4) nisatta「明日」

4) suy に対応する例：こ川ろし (32) konrusuy「ほしい」

「志」を含む場合：

1) si に対応する例：志りく川ね (19) sirkunne「暗い」

- 2) 「志ゆ」で so に対応する例：志ゆ川なう (41) sonno 「本当に」
3) 「志ゆ」で su に対応する例：志ゆ川遣い (42) sunke 「嘘をつく」
4) 「志や」で sa に対応する例：志やら遍* (58) saranpe 「絹」, 志や類、
(79) sarorun 「鶴」, 志や者 (90) sapa 「頭」, き志やら (92) kisara 「耳」
5) si に対応する例：志き (93) siki 「目」, 志ね川ふ (99), (100) sinep
「一」, 志ね遍さんふ (107) sinepes anpe 「九」, 志ね (111), (114) sine 「一つの」,
志け (114) sike 「束」

「せ」を含む場合：

- 1) se に対応する例：せ、川可い (68) sesekka 「湯」
2) 「せう」で su に対応する例：せう (69) su 「鍋」, 可せう (70) kasup
「ひしゃく」

「た」を含む場合：

ta に対応する例：可んたち (53) kamtaci 「糶」
たら (111), (112) tara 「俵」, にしやた (4) nisatta 「明日」

「多」を含む場合：

ta に対応する例：あ多い里い (12) ataye ri 「値段が高い」, あ多ひ者ぬ
(13) ataye pan 「値段が安い」, い多き (98) itanki 「椀」, てい多 (2), (3)
têta 「ここに」, おひ多 (44) opitta 「皆」

「ち」を含む場合：

- 1) ci に対応する例：ちい (52) ci 「煮える」, ちめんふ (58), (59) cimip
「着物」, ち可川ふ (80) cikap 「鳥」, ち川ふ (84) cip 「舟」, 可んたち (53)
kamtaci 「糶」
2) 「ちゑ」で se に対応する例：ちゑ川者 (75) seppa 「鰐」
3) 「ちゑ」で ce に対応する例：ちゑ川ふ (83) cep 「魚」, 遍可ち (61)
hekaci 「少年」

「つ」を含む場合：

tu に対応する例：つら (37) tura 「～と共に」, ㇿつう (94) etu 「鼻」, つ
うきう (97) tuki 「杯」, つ遍王んふ (100) tupesanpe 「八」

「川」を含む場合：

1) n に対応する例：志りく川ね (19) sirkunne 「暗い」, こ川ろし (32)
konrusuy 「ほしい」, 毛川らいけ (34) monrayke 「働く」, 志ゆ川なう (41)
sonno 「本当に」, 志ゆ川遣い (42) sunke 「嘘をつく」

2) k に対応する例：王川可 (67) wakka 「水」, せ、川可い (68) sesek-
ka 「湯」

3) p に対応する例

ちㇿ川者 (75) seppa 「鰐」

4) 「川ふ」で p に対応する例：ち可川ふ (80) cikap 「鳥」, ちㇿ川ふ (83)
cep 「魚」, ち川ふ (84) cip 「舟」, 志ね川ふ (99), (100) sinep 「一」, 徒川ふ
(100), (110) tup 「二」, 連川ふ (100) rep 「三」, いね川ふ (102) ínep 「四」, あし
きね川ふ (100) asiknep 「五」, ㇿ川く (2) ek 「来る」

5) tu に対応する例：ㇿ川ね (14) etunne 「気が進まない」

6) t に対応する例：く川 (60) kut 「帯」

「徒」を含む場合：

tu に対応する例：徒川ふ (100), (110) tup 「二」, 徒 (112) tu 「二つの」

「て」を含む場合：

te に対応する例：な可れてい (6) inankarapte 「こんにちは」, 者てき
(43) patek 「だけ」, てい多 (2), (3) téta 「ここに」

「と」を含む場合

とくい (65) tokuy 「友人(?)」, あふと (86) apto 「雨」

「な」を含む場合：

- 1) na に対応する例：な可れてい (6) inankarapte 「こんにちは」
- 2) 「なう」で no に対応する例：志ゆ川なう (41) sonno 「本当に」

「に」を含む場合：

にしやた (4) nisatta 「明日」

「尔」を含む場合：

ni に対応する例：や尔 (28) eani 「お前」，く者ん尔 (29), (37) kuani 「私」

「ぬ」を含む場合：

- 1) nu に対応する例：ぬんま (91) numa 「毛」
- 2) n に対応する例：あ多ひ者ぬ (13) ataye pan 「安い」

「ね」を含む場合：

nu に対応する例：ゑ川ね (14) etunne 「嫌う」，志ね川ふ (99), (100) sinep 「一」，いね川ふ (102) inep 「四」，あしきね川ふ (103) asiknep 「五」，志ね遍さんふ (107) sinepesanpe 「九」，志りく川ね (19) sirkunne 「暗い」，志ね (111), (114) sine 「一つの」

「の」を含む場合：

- 1) no に対応する例：
本* ろの (35) poronno 「たくさん」

「者」を含む場合：

- 1) pa に対応する例：あ多ひ者ぬ (13) ataye pan 「値段が安い」，者てき (43) patek 「だけ」，ちゑ川者 (75) seppa 「鏝」，志や者 (90) sapa 「頭」
- 2) wa に対応する例：く者ん尔 (29), (37) kuani

「ひ」を含む場合：

- 1) ye に対応する例：あ多ひ者ぬ (13) ataye pan 「安い」
- 2) pi に対応する例：おひ多 (44) opitta 「皆」

「び」を含む場合：

pi に対応する例：びる可 (8) pirka 「良い」

「ふ」を含む場合：

- 1) p に対応する例：あふと (86) apto 「雨」
- 2) 「川ふ」で p に対応する例：徒川ふ (100), (110) tup 「二」, ち可川ふ (80) cikap 「鳥」, ちゑ川ふ (83) cep 「魚」, ち川ふ (84) cip 「舟」, 志ね川ふ (99), (100) sinep 「一」, 連川ふ (101) rep 「三」, いね川ふ (102) ínep 「四」, あしきね川ふ (103) asiknep 「五」
- 3) 「んふ」で p に対応する例：ちめんふ (58), (59) cimip 「着物」
- 4) pe に対応する例外的な場合：ゆ王んふ (104) iwanpe 「六」, ある王んふ (105) arwanpe 「七」, つ遍王んふ (106) tupesanpe 「八」, 志ね遍さんふ (107) sinepesanpe 「九」, 王んふ (108), (109), (110) wanpe 「十」

「遍」を含む場合：

- 1) he に対応する例：遍可ち (61) hekaci 「少年」, 遍ろ川け (82) hero-ki 「ニシン」
- 2) pe に対応する例：あ川遍い (66) ape 「火」, つ遍王んふ (106) tupesanpe 「八」, 志ね遍さんふ (107) sinepesanpe 「九」
- 3) pe [be] に対応する例：志やら遍` (58) saranpe 「絹」
- 4) pi に対応する例：ゑ遍連け (71) epirkep 「小刀」

「本」を含む場合：

- 1) ho に対応する例：本しけ (15) hoski 「待て」
- 2) po に対応する例：本ん (36) pon, 遣ん本 (72) kempo 「針」

3) po [bo] に対応する例：本^ろの (35) poronno 「たくさん」

4) hu に対応する例：あ本ん (3) ahun 「入る」

「ま」を含む場合：

1) ma に対応する例：おまん (37), (46) oman 「行く」, あまも (52), (54) amam 「米」, ぬんま (91) numa 「毛」, 遣んま (95) kema 「足」, い可し満 (100) ikasma 「余る」, い可しま (110) ikasma 「余る」

2) [mma] に対応する例：いしやま (10) isam wa 「ないよ」

「満」を含む場合：

ma に対応する例：い可し満 (100) ikasma 「余る」

「む」を含む場合：

1) mu に対応する例：いらむし可れ (7) eramuskare, eramuskari 「知らない」, ゑむし (74) emus 「刀」

2) m に対応する例：うくらむくら (27) ukoramkor 「相談する」

「め」を含む場合：

me に対応する例：ちめんふ (58), (59) cimip 「着物」

「も」を含む場合：

1) mu に対応する例：

かもい (48) kamuy 「神」, 可もい (88) kamuy 「神」

2) m に対応する例：あまも (52), (54) amam 「米」

「毛」を含む場合：

1) mo に対応する例：毛川らいけ (34) monrayke 「働く」

2) mu に対応する例：毛川可り (55) mukar 「斧」

「や」を含む場合：

1) ya に対応する例

やいらい介れ (5) iyayraykere 「ありがとう」

「しや」、「志や」で sa に対応する例：いしやま (10) isam wa 「ないよ」、
志やら遍* (58) saranpe 「絹」、志や類、 (79) sarorun 「鶴」、志や者 (90)
sapa 「頭」、き志やら (92) kisara 「耳」、にしやた (4) nisatta 「明日」

3) ea に対応する例：や尔 (28) eani 「お前」

「ゆ」を含む場合：

1) 「志ゆ」で so に対応する例：志ゆ川なう (41) sonno 「本当に」

2) 「志ゆ」で su に対応する例：志ゆ川遣い (42) sunke 「嘘をつく」

3) i に対応する例：ゆるしか (48) iruska 「怒る」、ゆ王んふ (104)
iwanpe 「六」

「ら」を含む場合：

1) ra に対応する例：やいらい介れ (5) iyayraykere 「ありがとう」、
らむし可れ (7) eramuskare, eramuskari 「知らない」、うくらむくら (27)
ukoramkor 「相談する」、毛川らいけ (34) monrayke 「働く」、志やら遍* (58)
saranpe 「絹」、きらい (73) kiray 「櫛」、つら (37) tura 「～と共に」、連い
ら (85) réra 「風」、き志やら (92) kisara 「耳」、たら (111), (112) tara 「俵」

2) r に対応する例：うくらむくら (27) ukoramkor 「相談する」

「り」を含む場合：

r に対応する例：志りく川ね (19) sirkunne 「暗い」、毛川可り (55)
mukar 「斧」

「里」を含む場合：

ri に対応する例：あ多い里い (12) ataye ri 「値段が高い」、里可 (81)
rika 「クジラの脂身」、里いこ (89) rikop 「星」

「る」を含む場合：

1) r に対応する例：びる可 (8) pirka 「良い」, ある王んふ (105) arwanpe 七

2) ru に対応する例：ゆるしか (48) iruska 「怒る」

「類」を含む場合：

ro に対応する例：志や類、 (79) sarorun 「鶴」

「れ」を含む場合：

1) rap に対応する例：な可れてい (6) inankarapte 「こんにちは」

2) ri に対応する例：やいらい介れ (5) iyayraykere 「ありがとう」, いらむし可れ (7) eramuskari 「知らない」⁵

「連」を含む場合：

1) r に対応する例：ゑ遍連け (71) epirkep 「小刀」

2) re に対応する例：連いら (85) réra 「風」, 連川ふ (100) rep 「三」

「ろ」を含む場合：

1) ro に対応する例：本^{*} ろの (35) poronno 「たくさん」, 遍ろ川け (82) heroki 「ニシン」

2) ru に対応する例：こ川ろし (32) konrusuy 「ほしい」

「王」を含む場合：

wa に対応する例

王川可 (67) wakka 「水」, ゆ王んふ (104) iwanpe 「六」, ある王んふ (105) arwanpe 「七」, つ遍王んふ (106) tupesanpe 「八」, 王んふ (108), (109), (110)

⁵ 服部 (1964:160) には美幌方言で eramuskare 「知らない」という形式が報告されている。もしこの形式に対応するものだとすると、「れ」が re に対応する例となる。

wanpe 「十」

「ゑ」を含む場合：

- 1) 「うゑ」で we に対応する場合：うゑん (9) wen 「悪い」
- 2) e に対応する例：ゑ川く (2) ek 「来る」, ゑ川ね (14) etunne 「嫌う」, ゑ遍連け (71) epirkep 「小刀」, ゑむし (74) emus 「刀」, ゑつう (94) etu 「鼻」
- 3) 「ちゑ」で ce に対応する例：ちゑ川ふ (83) cep 「魚」
- 4) 「ちゑ」で se に対応する例：, ちゑ川者 (75) 「鰐」

「ん」を含む場合：

- 1) [m] に対応する例：可んたち (53) kamtaci 「糍」, 遣ん本 (72) kempo 「針」, ゆ王んふ (104) iwanpe 「六」
- 2) 「んふ」で p に対応する例：ちめんふ (58), (59) cimip 「着物」
- 3) 「んふ」で pe に対応する例：ある王んふ (105) arwanpe 「七」, つ遍王んふ (106) tupesanpe 「八」, 志ね遍さんふ (107) sinepesanpe 「九」, 王んふ (108), (109), (110) wanpe 「十」
- 4) k に対応する例：おん可い (62) okay 「男」
- 5) n に対応する例：うゑん (9) wen 「悪い」, 本ん (36) pon 「小さい」, おまん (37), (46) oman 「行く」, あ本ん (3) ahun 「入る」
- 6) 対応する音がない位置に現れる例：おん可い (35) okay 「ある」, ゑんま (91) numa 「毛」, 遣んま (95) kema 「足」

「ゝ」を含む場合：

- 1) k に対応する例：せゝ川可い (68) sesekka 「湯」
- 2) ru に対応する例：志や類ゝ (79) sarorun 「鶴」

対応する仮名がない場合：

- 1) i の欠如の例：やいらい介れ (5) iyayraykere 「ありがとう」, な可れ

てい (6) inankarapte 「こんにちは」

2) p の欠如の例：

里いこ (89) rikop 「星」

可せう (70) kasup 「ひしゃく」

3) t の欠如の例：おひ多 (44) opitta, にしやた (4) nisatta 「明日」

4) n の欠如の例：い多き (98) itanki 「椀」, 志やら遍* (58) saranpe 「絹」, 本* ろの (35) poronno 「たくさん」

現代資料に音がない位置に仮名が現れる場合：

1) 「川」が現れる例：遍ろ川け (82) heroki 「ニシン」, 毛川可り (55) mukar 「斧」, あ川遍い (66) ape 「火」

2) 「ん」が現れる例：く者ん尔 (29), (37) kuani 「私」, おん可い (35) okay 「ある」

3) 「い」が現れる場合：志ゆ川遣い (42) sunke 「嘘をつく」, せ、川可い (68) sesekka 「湯」

4) 「う」が現れる場合：志ゆ川なう (41) sonno 「本当に」, つうきう (97) tūki 「杯」

現段階では、以上の点すべてを詳しく論ずるまでには至っていないので、以下では特に問題となる点に限って述べることにする。

佐藤 (1998 b) でも触れたように、「松前ノ言」には「川 (つ)」, 「ん」を現代の仮名の用法で解釈したのではうまく説明のつかないような例がいくつか現れる。すなわち、以下のようなものである。

1) n に「川」が対応する場合：

志りく川ね (19) sirkunne 「暗い」, こ川ろし (32) konrusuy 「ほしい」, 毛川らいけ (34) monrayke 「働く」, 志ゆ川なう (41) sonno 「本当に」, 志ゆ川遣い (42) sunke 「嘘をつく」

2) p に「んふ」が対応する場合：ちめんふ (58), (59) cimip 「着物」

この現象について、金田一（1924）は「筆者に促音と撥音の書き違い」があったのではないかと述べている。また、佐藤（1998 b）は「草書体の「ん」を「川」と誤読したのではないかと」という可能性を指摘した。しかし、筆者は現時点では、異なる解釈が可能ではないかと考えている。

国語学会編（1980：567）には「（促音は）しばしば撥音と共通の表記をとっていることは注目すべきである」と述べられている。また、浜田（1951 a）は日本語における促音と撥音の表記について次のように述べている。

以後平安朝を通じて院政期頃まで、否厳密に云へば室町末期に至るまでは、促音と撥音との表記法は相互に共通せるもの多く、而も時代により文献によつて極めて区々たるものがあつて、到底現代に於けるが如き区別意識を当時の人々が此の両音に対してもつてゐたとは考え難いのである。

（浜田 1951 a：92）

また、中田編（1972）でも次のように述べられている。

…室町中後期においても、秀吉の書状などに、「ほんく（発句）」「せんかく（折角）」などの例が、かな抄物などにも、「二人ナカカワルクナンタホトニ」「弟子トモチリチリニナンツタホトニ」（以上史記抄）などの例のあることが報告されている（浜田敦，土井忠生，森田武氏ら）。右の『史記抄』（桃源瑞仙）などでは、「ンツ」の形をもって写している例さえある。

しかし、大勢は、室町期において、促音の表記は「ツ」による方法がとられた。

キリシタン資料では、

taxxite（達して） motte（以って） tappai（答拝）

などのごとく、次の文字と同一の、あるいは同音の文字を重ねて表記する形をとっている。

（中田編 1972：227-8）

「松前ノ言」において、音節末の *n* に対して「川（つ）」が当てられたり、音節末の *p* に対して「ん」が当てられたりするの、上記のような日本語の文字表記史上の事実が反映されている可能性がある。すなわち、「松前ノ言」が成立した時点では、当該のアイヌ語の単語は、少なくとも問題の音節末の *n*、音節末の *p* については現代とほぼ同じ音声的特徴を有していたと考えられる。これらを表記するのにもっともふさわしい表記方法は、撥音や促音を表すものであったろうが、「松前ノ言」が書かれた当時の日本語においては促音や撥音は比較的新しく日本語の音韻体系の中に組み込まれた音素であったために、表記法がまだ確立されていなかったと考えられる。そのため、現代から見れば奇妙に思われるが「志りく川ね」⁶ のように *n* に「川」が用いられたり、「ちめんふ」のように *p* に「んふ」が用いられたりしているのだと考えられる⁷。

このような考えに従えば、現代とは異なる表記がされていても、この場合には現代と著しく異なる形を表したのではなく、アイヌ語の歴史的な変化とは別の要因によるものだ、ということになるわけであるが、別の意味でこのような解釈は重要な意味を持つ。詳細は日本語の表記史の専門家のご教示をまたなければならないが、アイヌ語の表記から窺える促音表記と撥音表記の混用がもし事実だとすれば、このことは「松前ノ言」の成立年代について重要な示唆を与えるものと言える。中田編 (1972) の、「大勢は、室町期において、促音の表記は（「ん」でなく一佐藤注）「ツ」による方法がとられた」という記述、また、浜田 (1951 a) の「室町末期に至るまでは、促音と撥音との表記法は相互に共通せるもの多く」という記述を信頼するとすれば、「松前ノ言」の成立年代とされる江戸初期（寛永年間—1624-1644）という佐々木 (1925) の推定が強化されるばかりか、成立年代が室町末期にまで遡る可能性

⁶ もっとも、「川」が撥音の表記に用いられた室町期の用例はいまのところ挙げることができない。専門家のご教示をお待ちしたい。

⁷ 「松前ノ言」の日本語表記には「川」を撥音の表記に用いた例はない。また、促音を含む日本語の単語の確実な例もないため、「松前ノ言」の日本語表記自体からここで述べた仮説を立証することはできない。

も出てくるからである。今後、他の表記上の問題と合わせて、さらに研究する必要がある。

次に、「松前ノ言」の表記が現代とは異なる言語状態を反映しているのではないと思われる点について指摘しておきたい。

「松前ノ言」には現代のアイヌ語の形式からみると以下のような不可解な表記を取っているものがみられる。

「んふ」で pe に対応する例：ある王んふ (Ⅱ) arwanpe 「七」、つ遍王んふ (Ⅲ) tupesanpe 「八」、志ね遍さんふ (Ⅳ) sinepesanpe 「九」、王んふ (Ⅴ), (Ⅵ) wanpe 「十」

「松前ノ言」には pe ([be] か) に対応する表記として、「遍^{*}」という表記が一例 (志やら遍^{*} (58) saranpe 「絹」⁸⁾)、「遍」^{*}という表記が三例 (あ川遍い (66) ape 「火」、つ遍王んふ (Ⅲ) tupesanpe 「八」、志ね遍さんふ (Ⅳ) sinepesanpe 「九」) みられるので、少なくとも「ある王 (ん) 遍」、「ある王 (ん) 遍」のような表記を用いることは可能であった筈である。にもかかわらず「んふ」という表記が用いられているのは問題である。すなわち、この場合は、現代の資料とは異なる特徴が反映されている可能性がある。

現代のアイヌ語資料では p 「もの」という接尾辞には二つの交替形があり、母音の後では p、子音のあとでは pe という相補分布を示す (千歳方言の例：a-mi-p 「着物」、tópen-pe 「甘い物」)。この交替は、共時的には p を基本形に立てて、アイヌ語の音韻構造の制約から、音節末に子音連続が立たないために後に母音 e が現れる、と説明できる。しかし、この説明では、なぜ他の母音でなく e が現れるのか、という理由を説明することができない。ここで問題となるのが「松前ノ言」の「ある王んふ」の「んふ」のような表記である。この表記は、p/pe のような交替の初期の段階を示しているのではないだろうか。すなわち、pe は最初から e を有していたのではなく、pe の e は [ə] のような中舌母音から発達したと考えるのである。音節構造の制約から母音が

⁸⁾ saranpe は形態素分析ができない形式であり、末尾の pe が「もの」に当たる形態素であるかどうかは現時点では不明である。

子音の前後に添加される現象は多くの言語でみられるが、その場合に用いられる母音として中舌母音が用いられることはそれほど不合理なことではないと思われる。この位置に中舌母音を仮定した場合、アイヌ語の音韻体系全体において中舌母音がどのような位置付けのものであったかが次に問題となる。詳細は今後の課題としなければならないが、おそらく他の言語における挿入母音と同様、形態的には大きな重要性を持たず、音素としての地位も独立の母音と、子音の余剰的な特徴との中間段階であって、ごく不安定なものであったと考えられる。そのために早い時代に e に合流してしまった、と考えれば今日、このような段階を示す方言が残っていないことの説明もつく。いまのところ、全くの仮説であるが、他の資料による検証をまちたい。

4. アンジェリスの「蝦夷国報告書」所載のアイヌ語について

以下では、1618 年と 1621 年に蝦夷地松前に渡航したイタリア人イエズス会士アンジェリスが残したアイヌ語の記録について問題点を指摘したい。アンジェリスのアイヌ語の記録は「蝦夷国報告書」（チースリク（1962）にポルトガル語原文が、児玉（1941）にイタリア語訳が載る）として知られる。

以下に、チースリク（1962）によってポルトガル語原文から翻刻されたものを示す。その際、児玉（1941）に載るイタリア語版の影印に載る形を括弧に入れて示す（ただし、印刷不鮮明のため、補助記号が付加されている可能性があってもすべて省略してある）。その後にチースリクによる日本語訳と、筆者が調査した現代の方言の近似する形式を示す。

cassamay (Cassamai) 「男」 不明

menocoxi (Menocoxi) 「女性」 menoko 「女性」（千歳方言）

fachappu (Facciapu) 「父」 acapo 「おじ」（千歳方言）

faibo (Faibo) 「母」 hapo 「母」（静内方言）

yubi (Yubi) 「兄」 yupi 「～の兄」（千歳方言）

aqi (Achi) 「弟」 aki 「～の弟」（千歳方言）

occay (Occay) 「少年」 okkay 「男」 (静内方言)
canachi (Canaci) 「少女」 不明
aba (Aba) 「親属」 mat-apa 「妹 (?)」 (千歳方言)
amanequ (Amanechi) 「既婚者」 不明
xaba (Xaba) 「頭」 sapa 「頭」 (千歳方言)
xabanuma (Xabanuma) 「頭髮」 numa 「毛」 (千歳方言)
xeqi (Rechi) 「髭」 reki 「ひげ」 (千歳方言)
cu (Cu) 「弓」 ku 「弓」 (千歳方言)
ay (Ay) 「箭」 ay 「矢」 (千歳方言)
yemuxi (Yemuxi) 「刀」 emus 「刀」 (千歳方言)
Xineppu cu (Xineppu cu) 「一本の弓」 sinep 「一つ」 (千歳方言)
Xineppu ay (Xineppu ay) 「一本の箭」

上の資料の中で問題となる点の一つは、yemuxi (Yemuxi) 「刀」の表記である。語頭の y は現代の形式と一致しない。この点は、以下の理由で、アンジェリスがアイヌ語話者から直接アイヌ語を聞いたかどうかに疑問を投げかけるものである。橋本 (1966: 65) によれば、室町末期の日本語では語頭の「エ」は ye であったとされる。もしそうだとすると、アンジェリスが yemuxi と書いているのは、仮名で書かれたアイヌ語を、当時の宣教師のローマ字転写法で表記したものではないか、という疑いが起こる⁹。

次に、問題となるのは、faibo 「父」という表記である。

⁹ この点については別の解釈の可能性もある。日本語東北方言の狭い e を ye と表記した可能性である。土井 (1971: 73-5) によれば、『日蘭辞書』(1603) に収められた方言は近畿地方と九州地方のものであり、ロドリゲス『日本大文典』(1604-8) には近畿、九州の他、中国地方、関東地方の方言についての記述があるという。いずれにしても関東以北の東北方言については言及がなく、宣教師達が日本語東北方言をどのようにローマ字表記したか、手がかりとすべきものがない。時代や国も違い、あくまでも参考であるが、村山 (1965) には 1772 年に J. G. ゲオルギによって記録された下北半島出身の漂流民の日本語が収録されている。これによれば、Edo 江戸, Ido 糸 (村山 1965: 205) であって、予想される ye もしくは je のような表記はみられない。

橋本（1961）は室町時代末期の日本語のハ行の発音について次のように述べている。

ハヒヘホを fa fi fe fo と書いたのは、これらの子音が、フの場合と同じく f であったか、少くとも f に近い音であつた為と解するのが至當である。

橋本（1961：249-50）

アンジェリスは、日本語の「船」を *fune* と表記していることから（チースリク 1962：113）、f は h ではなく、恐らくは [Φ] を表記したものと考えられるが、そうだとすると、なぜ *faibo* と書いているのかが問題になる。日本語の表記にも h が全く用いられていないため、[h] に h を当てる表記方法をアンジェリスが知っていたかどうかはわからない。しかし、「法度」を *fatto*、「津軽の外が浜」を *Tcugaruno sotogafama* と表記している点からみて、アンジェリスが日本語の「ハ」を fa と表記したことは明らかである。つまり、アイヌ語の *faibo* の f という表記は、当時のアイヌ語の発音に基づいたものと考ええるよりは当時の日本語仮名表記を宣教師によるローマ字翻字法に基づいて機械的に転写したものだと考えれば合理的に説明がつくのではないだろうか。ただし、発音についてはやはり問題が残るであろう。日本語やアイヌ語の問題の形はいずれも [ha] だったが、ポルトガル語に h がないため、それに近い音を表す文字として f が選ばれたとも考えられる。あるいは、日本語のハ行の頭音は唇音であったために f で書かれ、さらに、今日と違い、この時代の「父」というアイヌ語の単語の語頭音も唇音だったという可能性も皆無とは言えない。とはいえ、語頭の *ye*、語頭の f という二つの現象のいずれもが仮名のローマ字転写法から説明が可能である、という点はアンジェリス資料を理解する上で無視できないものであろう。仮名表記に由来すると思われる特徴は、*xineppu* のような語末に母音を書く表記にも現れていると考えられる。他にも考察すべき点はあると思われるが、今後を期したい。

5. おわりに

以上、方法論的な問題と合わせて、特に最も古い時代に属するアイヌ語古文献が持ついくつかの問題点について述べた。最後にあらためてアイヌ語古文献の研究においては、現代のアイヌ語資料に基づいた手堅い言語学的な研究がなければ何も明らかにすることができないこと、現代のアイヌ語についての言語学的な研究に基づかずに、単に既存の辞書から似ている単語を博捜するのは不毛である、ということを強調しておきたい。

参考文献

- チースリク, H. (1962), 『北方探検記』(吉川弘文館)
- 土井忠生 (1971), 『吉利支丹語学の研究 新版』(三省堂)
- 土井忠生訳 (1955), 『ロドリゲス日本大文典』(三省堂)
- 浜田敦 (1946), 「促音沿革考」『國語・國文』40(10), 1-14
- (1951 a), 「促音と撥音 (上)」『人文研究』1 (1), 91-113
- (1951 b), 「促音と撥音 (下)」『人文研究』1 (2), 32-52
- 橋本進吉 (1961), 『キリシタン教義の研究』(岩波書店)
- (1966), 『国語音韻史』(岩波書店)
- 金田一京助 (1924), 「世界最古の蝦夷語彙——佐佐木博士所蔵の『松前の言』について」『心の花』28(4)
- 児玉作左衛門 (1941), 「デ・アンジェリスの蝦夷國報告書に就いて」『北方文化研究報告』4, 201-296
- 国語学会編 (1980), 『国語学大辞典』(東京堂出版)
- 村山七郎 (1965), 『漂流民の言語』(吉川弘文館)
- 中田祝夫編 (1972), 『講座国語史 第2巻 音韻史・文字史』(大修館書店)
- 佐佐木信綱 (1925), 『百代草』(私家版)
- 佐藤知己 (1995), 『蝦夷言いろは引の研究』(北海道大学文学部言語学研究室)
- (1998 a), 「天理大学付属天理図書館所蔵「松前ノ言」について(1)」『北海道大学文学部紀要』46(3), 191-215
- (1998 b), 「天理大学付属天理図書館所蔵「松前ノ言」について(2)」『北海道大学文学部紀要』47(4), 217-253

北大文学研究科紀要

- (2003 a), 「酒田市立光丘文庫所蔵「蝦夷記」のアイヌ語について」『北大文学研究科紀要』 111, 95-118
- (2003 b), 「彰考館旧蔵アイヌ語テキスト「蝦夷チャランケ並浄瑠璃言」について」『北海道大学文学研究科紀要』 109, 31-58
- (2004), 『古文獻によるアイヌ語諸方言の比較研究』(北海道大学大学院文学研究科)
- (2005), 「「申渡」のアイヌ語訳文に関する一考察」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 11, 1-45